

第4回 会報・ホームページ委員が 調査しました!

着ぐるみ「たくまくん」誕生秘話～有限会社アナビス～

会報・ホームページ委員 嶋田 俊二郎

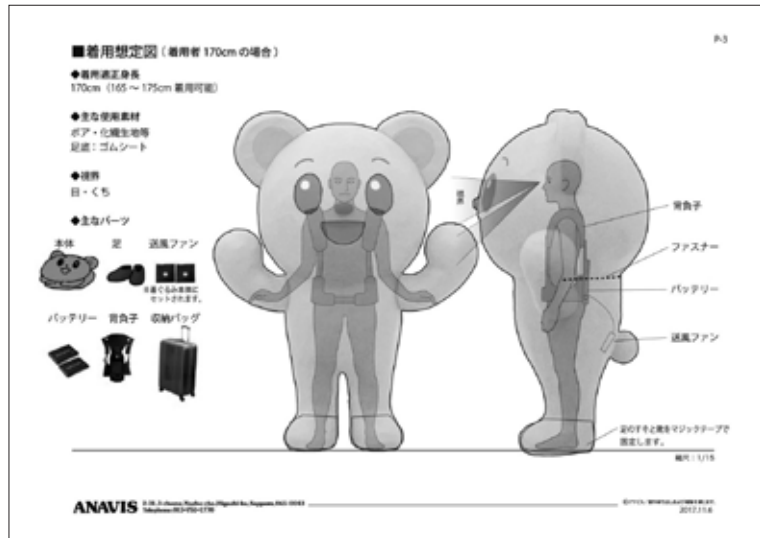
今年の新年賀詞交歓会で、着ぐるみ「たくまくん」が初披露されましたが、今回は着ぐるみ「たくまくん」完成を祝して、着ぐるみの制作工程などについて制作会社であるアナビスを取材させて頂きました。

着ぐるみ「たくまくん」は平成29年10月から12月末までの約3か月間のスケジュールで制作され、山田あさみ取締役をはじめ多くのスタッフの方々の手によって完成しました。

10月は仕様書案が提出され、着ぐるみのタイプ、大きさや色、ポーズの提案及び検討が繰り返されました。着ぐるみのタイプには「フォームタイプ」と「バルーンタイプ」の2つのタイプがあり、それぞれの利点があります。「フォームタイプ」は一般的な着ぐるみで大きなぬいぐるみのイメージです。ウレタンフォーム製なので細部まで造形しやすいという利点があります。一方「バルーンタイプ」は布を空気で膨らませてベルトで吊るタイプなので、動きやすい、小さく収納できるという利点があります。

「たくまくん」は札幌以外の各支部にも出張して使用できるように小さく収納できるという利点を重視し、「バルーンタイプ」を採用することになりました。「バルーンタイプ」はバッテリーでファンを回転させ、着ぐるみ内部に空気を送り、布を膨らませる構造になっています。

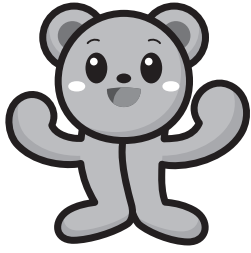
アナビスは、(地方独立行政法人)北海道立総合研究機構工業試験場のサポートを受け、バッテリーの小型化や軽量化、着ぐるみ内部の密閉度の調整など3年間の試作期間を経て、2015年に「バルーンタイプ」の自社製作に成功しました。



「フォームタイプ」の着用想定図 アナビス提供



「たくまくん」クレイモデル アナビス提供



「北」の文字を表現した
「たくまくん」



はっぴに「北」の文字をデザイン

10月後半になり、色、布の質感、スケールなど「たくまくん」の仕様が決まりました。クレイ（粘土）モデルの作成が始まり、「たくまくん」がはじめて立体化されていきました。クレイモデルは立体化されたイメージを顧客へ提示するためと、次の工程で使用する生地型の型紙のベースとして制作されるものです。立体化の工程はデザイナーの宮川友維さんが担当されていたのですが、「たくまくんの「北」を表現したデザインを立体化するのが一番苦労した」とのことでした。皆さんもご存知のように、たくまくんは「北」の文字を表現したデザインなのですが、その通りに立体化すると「たくまくん」のお腹に黒い縦線が入り違和感が生じます。子熊のかわいらしい体型と同時に「北」の文字を表現したデザインにすることが、この時点での課題でした。会員がイベント時に着用する法被（はっぴ）を「たくまくん」にも着せようということになり、その法被に「北」の文字を取り入れることで見事に課題をクリアすることができ、スタッフさん達はホッとされたようです。

11月になり、クレイモデルをベースにした型紙の原型から生地をおこし、実際に空気が漏れない素材の布を縫製する工程に入りますが、その前に1/2スケール（90cm）の縮小モデルの試作が行われました。ここで、送風テストや生地を膨らましたときにイメージ通りの外観になっているか細かな調整が行われます。たくまくんの目の位置など細部の調整や、凹凸やふくらみを滑らかにするなどの細かいテストが繰り返されました。その後、11月中旬から、調整後の型紙から原寸大の生地をおこし、本製作の工程に入り縫製作業が開始されました。アナビスは社内に縫い手さん（ミシンを用いて縫製作業を行うスタッフ）がいて自社で作業が行われます。型作成から本製作の工程はディレクターの澁谷聡子さんが担当されました。澁谷ディレクターは、実際に着ぐるみの中に入ったときの着心地、動きやすさなどにも配慮して仕上げていきました。手の上がり具合など微調整を繰り返し、3回の手直しが加えられ12月末に着ぐるみ「たくまくん」は完成しました。

着ぐるみ「たくまくん」を初めて目にして、グラフィックのイメージがそのまま三次元化されたという印象を持ちましたが、それを実現するためには、アナビスの皆さんの並々ならぬ労力と女性ならではの心遣いがありました。

今年40周年のアナビスは、昭和51年に小さなアトリエとして発足し、昭和53年に法人化しました。グラフィックデザインから商品開発、広告制作、販売促進、イベント企画など幅広い事業を手掛け、北海道や札幌市などの自治体やテレビ局などの大手企業と取引しているデザイン会社です。業務内容は顧客ニーズに応じてゆく過程で増えて行きました。その一部門である着ぐるみ制作は「形のあるものを残したい」という想いからスタートし、現在では着ぐるみ制作の老舗として300体の制作を手がけました。山田取締役は会社の方向性を向うと「北海道の地域性を大事にして、地元企業とこれからも一緒に歩んでいきたい」と話されていました。

40年前に4人で立ち上げたアトリエが、単なる制作会社ではなく自治体や大手企業に対して提案できる高い技術力を備えたデザイン会社に成長した実績は、業種が違う我々行政書士にも参考になるものだと思います。



左から山田取締役、澁谷ディレクター、
宮川デザイナー



有限会社アナビス
札幌市東区苗穂町3丁目2-31